

袖団カフェへようこそ

お茶やお菓子を囲みながら、いろんな話をしませんか。そう呼びかける「袖団カフェ」が毎月第三日曜日、袖ヶ浦団地集会所で開かれています。誰もが安心して地域で暮らしていけるように、医療、福祉の専門職も加わって、認知症や介護の必要な人、その家族などの相談に応じたり、交流を楽しむスペースです。その運営にかかわっている有ウエルフェア「ケアプラン秋津」の広野義明さんにレポートしてもらいました。



認知症等の高齢者が増えていくことによりさまざまな課題が考えられる中、2012年9月に『認知症施策推進5か年計画』通称「オレンジプラン」が厚生労働省により策定されました。(本年1月には新オレンジプランを公表)この中で定めている7つの目標の一つに「地域での日常生活・家族の支援の強化」とあります。

ここでは、「認知症カフェ」(認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場)の普及などにより、認知症の人やその家族等に対する支援を推進するとあります。「新オレンジプラン」では更に積極的に認知症カフェ等の設置を目指す内容となっています。

そのような中、昨年の12月から「袖団カフェ」という認知症カフェを袖ヶ浦団地集会所にて毎月第三日曜日に開催しています。

お茶とお菓子をつまみながら医師や看護師や薬剤師、ケアマネジャーや介護士、市の職員などと一緒にテーブルを囲んで気軽に話ができます。話の内容は、人それぞれで介護の相談だったり、健康相談だったり、最近の出来事だったり、旦那さんへの愚痴だったり。もちろん、他人には聞かれたくない場合は個別でお話を伺っています。

このようなカフェは千葉県の中でも既にいくつも開かれています。その中

でも市原市にある「カフェかさね」は、この袖団カフェを始めるきっかけとなった、とても素敵なカフェです。

「カフェかさね」は週3回開店しています。美味しい手作りランチを提供しており、認知症の状態にある人、家族を介護している人、地域の人のさまざまな人が訪れています。

私たちが訪問した時も、奥さんを介護している男性の苦労話を軽度認知障害があり自らも介護サービスを受けている男性が親身になって聴いていて、その話に隣のテーブルで食事をしていた近所の主婦も入ってきて、みんなを男性を励ますという場面が見られました。

開設者の方に『こんな素敵な場所が習志野市にもあったらいいなあ』と呟いたところ、『やればいいじゃない』と一言であっさり返されましたが、

結局、この一言が原動力となり、袖団カフェの開催に向け動き出しました。

実際に動いてみると、多くの方々がカフェの開催に対して共感してくださ

り、運営にご協力くださることとなりました。そして、現在も開催を重ねるごとに協力者が増えていき、袖団カフェを支えてくださっています。そのおかげで、カフェには予想以上の参加者があり盛況となっています。

3月の開催時は、一般参加者が20人以上、協力者が14人という参加状況になりました。計画当初の段階では、5〜6人の方が訪れてくれて、その内のひとりでもここを必要だと感じている人が出来たら大成功だと話をしていたことを思えば、現在の状況は大成功以上だと言えます。

実際に参加者の方を地域包括や民生委員に繋げたり、カフェでの医療や介護の相談が介護サービスの見直や導入になったりするケースも増えていきます。更に、参加された皆さんから「楽しかった」「来てよかった」とのお言葉を頂き、とても嬉しく、励みにもなっています。

しかし、どうしても一点だけ気に

新オレンジプラン

(認知症施策推進総合戦略)

・基本的な考え方

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができ、社会の実現を目指す。

・七つの柱

① 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進

② 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供

③ 若年性認知症施策の強化

④ 認知症の人の介護者への支援

⑤ 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進

⑥ 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進

⑦ 認知症の人やその家族の視点の重視

なっている事があるのです。それは、認知症の状態にあるご本人が来づらいう場所になっているのではないか？という点です。

昨年12月の初開催の時に、ある婦人が一人でカフェに来てくれました。その婦人は、他市から袖ヶ浦団地に引越して来られ、まだ日も浅く地域のこともあまり良くわからないが、ポストに袖ヶ浦カフェのチラシが入っていたので来てみたとのことでした。他の方々と一緒にテーブルを囲みながらその婦人とも楽しく話を進めていると、「実は私、この前、病院で認知症だと言われたんです」とおっしゃいました。私自身は、その瞬間まで全く気づきませんでした。詳しくお話を伺うと、やはり認知症の状態にあるようでした。早速その場で、地域包括支援センターの職員と繋ぎ、何かあった場合の連絡先などを交換することができました。翌月の開催時にも、前回と同様にチラシを手に来ていただきましたが、

始まって間もなくして会場から出て行かれ、その後戻って来られませんでした。そして、その後の開催にも姿は見られていません。

どうしてこの方は途中で退出し、その後の開催にも来なくなったのか？ たまたまなのかもしれませんし、居づらい理由があるのかも知れません。可能性はさまざま考えられ、何が本当の理由なのかはわからないと思いますが、その理由を私たちが考えて、その方にとって居やすい場所、必要な場所にしていくことが袖ヶ浦カフェを更に大きく機能させる事に繋がっていくのではないかと感じています。とは言い、この袖ヶ浦カフェはまだまだ始まったばかりで、本当に多くの人に支えられながらなんとか開催できていく状況です。当面の目標は、このカフェを継続していくことです。ご興味のある方は、ぜひご来店頂き、さらにはお力添え頂ければ大変うれしく思います。

袖ヶ浦カフェ誕生 そして成長への思いと願い

認知症の夫の介護中、習志野市内を二人でかなりの距離を歩いていました。夫は前頭側頭葉型の認知症で身体機能は衰えることなく、毎日歩くことを楽しみに生活をしました。そんな中で急激に病状が変化する時期があり、対応に苦慮する「私」は、「この悩みを今受けて聴いてくれる場所」があつたら、「心穏やかに夫に向き合う私に戻れるのに」と・・・？ 何度も思っていた私がいきました。認知症の本人も介護者も精神的に安心して居られる場所が街にあつたらどんなに救われることかと思いましたが、

こんな思いを実現していただけることを願って「袖ヶ浦カフェの成長に期待と願い」を寄せ参加させていただいています。
(元介護者)

認知症カフェ



すみクリニック
堀部 和夫

習志野市では高齢化が進み、すでに30%を越える高齢化率の地域が拡大してきました。

認知症は誰もがなるかもしれない状態で、65歳以上の方の5人に1人は認知症もしくはその予備軍ではないかと言われております。今、認知症の診断、重症度、付随する症状への対応など、異なる幾つかの職業の人たちが協力して行動をしていくことが強く求められています。そのため、医師だけでなく歯科医師、薬剤師、ケアマネージャー、訪問看護師、介護福祉士、ヘルパーなどの多くの職種がサポートするシステムが始まりました。

秋津地区ではこれまで10年以上にわたり在宅での介護と医療の連絡会議を行ってきましたが、認知症に取り組んでいる人たちによる自発的発想から認知症カフェが草の根活動として平成26年12月より袖ヶ浦団地集会所で始まりました。

市役所や病院へ行くのは気が重し、かといつてどこかで認知症にかかわるさまざまなことを気楽に相談できる処はないのかと悩む人に訪れてほしいとの考えでカフェを開きました。

相談は医師による診断と治療から始まり、薬剤師による薬剤の効果と副作用、習志野市での取り組みなどを始め、介護保険をどのようにして申請するのか、また認知症の方が利用できるサービスはどのようなものがあるのか、訪問看護師による自宅への訪問看護についてなどがあり、多くの職種の方が応答しています。

医師会は主として医療面での相談と対応について医師を派遣し、この活動

